

看護学統合研究
2014.9 16巻1号

高齢者の Generativity における「関心」の特質, 及び高齢者の生活に及ぼす Generativity の検討

讃 井 真 理

広島文化学園大学看護学部

河 野 保 子

広島文化学園大学大学院看護学研究科

高齢者の Generativity における「関心」の特質、及び高齢者の生活に及ぼす Generativity の検討

広島文化学園大学看護学部

讃 井 真 理

広島文化学園大学大学院看護学研究科

河 野 保 子

論文要旨 本研究の目的は高齢者の Generativity における「関心」の特質を検証し、Generativity が高齢者の生活にどのような影響を与えているかを明らかにすることである。A 地域在住高齢者276名を対象に、丸島の GCS-R (世代性関心尺度) を用いて調査し、探索的因子分析を行った結果、高齢者の世代性への関心の下位概念として3因子15項目が抽出された(創造性, $\alpha=.89$, 世代継承性, $\alpha=.74$, 積極性, $\alpha=.68$)。なお、確認的因子分析においても容認できる適合度が示された。その後、高齢者の世代性への関心概念を潜在変数として心理社会的要因との間で、共分散構造分析を行った結果、モデルの適合度は許容できる範囲であった。高齢者の Generativity は他者との交流から影響を受け、世代性関心を介在して高齢者のスピリチュアリティ健康感、孤独感、自己効力感、自尊感情に影響し、更にそれらを通して、生活満足度に影響を及ぼすことが明らかとなった。

キーワード：高齢者、Generativity、関心、生活満足

■ はじめに

健全に老い、充実した人生を送って天寿を全うするということは人間誰しもが望むことである。人間にとって、健全に生きるということは、長い人生において、加齢などによる身体的機能の喪失を認めつつも、それでもなお、直面する様々な問題を解決し、人間として発達し続ける存在であり続けることにある。Erikson, E. H. は、老年期の発達段階とライフタスクを、英知である人間の強さや賢さをもって、統合性を持った人間として発達しながら生きることであるとした¹⁾。しかし、人間は生老病死を避けて通ることはできない存在でもある。超高齢社会を迎えた我が国において、生・老・病・死を包含しながら、人間としての統合性を発揮させ、老年期に QOL (Quality of life) を、いかに高めて生きる存在となるかは、高齢者自身にも、また高齢者を取り巻く社会においても課題である。

その課題に対して、これまで、延伸する老年期

に向けた総合的な健康づくりを目的に運動や食生活に関する健康教育等が行われ、生活習慣病予防対策が行われてきた。また、高齢者の保健医療福祉対策として、転倒・骨折等による寝たきり予防、閉じこもりやうつ、認知症の予防などが重要な課題として認識されている。高齢者施設においても自立に向けた身体的ケアが試みられ、自立が困難となった場合には身体的機能の維持や二次的障害の予防などのケアが実践されている。しかし、超高齢社会を迎えた我が国では、高齢者の孤独死の増加や、高齢者の自殺者が1万人を超える²⁾などの問題もクローズアップされており、高齢者への心理社会的ケアは、十分とは言えない。それゆえ、老いや病を抱えながらも、そして来るべき死の受容に対して、高齢者が全人的存在として発達し続ける方法を検討する必要がある。

高齢者の心理発達の側面として、近年、注目されている概念が Generativity³⁾ である。Generativity とは、一般的に「世代性」と訳されており、中年期・老年期の重要な発達課題として、位置づけら

れている。Generativity は、Erikson, E. H. によって創造された用語で、壮年期の発達課題として生み育てるといった概念で示された¹⁾。さらに、Generativity は、McAdams, D. P. らによって創造性や継承性⁴⁻⁸⁾といった広い概念にまで発展し、McAdams は、自身の Generativity 理論の中で、Generativity を構成する7つの要素を提示し、概念構成図を示した。それによると、Generativity は人間の「内的希求」と「文化的要請」に動機付けられ、「Generativity への関心」が喚起されるとしている。それはまた、人間としての「信念」と「次世代への取り組み（関与）」の「行動」へと繋がっていき、個人の人生に対する「語り」によって、高齢者自身の中で意味づけられるというものである。

小澤³⁾ は、老年期の Generativity の心理社会的適応メカニズムを解明するための課題について、Generativity が重層的で複雑な概念であること、基盤にある心理社会的適応という要素の検討が十分に行われていないこと、老年期の Generativity 概念の整備が十分でないことを指摘している。今日、我が国は超高齢社会を迎えており、高齢者の圧倒的な数の増加によって、次世代の高齢者に対する考えが、以前と比べて稀少で貴老ではないという見方に変化しており、他方、高齢者もまた、大勢の年長者の中のひとりという認識でしかなく、高齢者は継承者としての役割を果たすことができているとも言えよう。そのような社会状況の中で、高齢者はどのように社会に存在し、自分をいかに表現して、社会的存在としての個性を発揮しようとしているのか把握する必要がある。「Generativity への関心」は、「Generativity の行動」へと繋がる動機づけとなるもので、高齢者が自分自身を社会的存在として認識し、次世代に有意・価値ある自己を継承するという役割を発揮することが求められる。高齢者の「Generativity への関心」が、高齢者の心理的状況と文化的な要請によって影響し発揮するものであるならば、その「関心」に影響する心理社会的要素は何であるのか、また、それらはどのように高齢者の生活に影響を及ぼしているかを追究することは、高齢者の Generativity の特質をより明確にするだけでなく、高齢者の QOL を追究することにつながる。

これまで、Generativity は、生活満足度や精神的健康、抑うつ状態などの適応的・非適応的な心理特性との結びつきについて報告されている³⁾。

また、Generativity を測定することを目的として、幅広い年齢層を対象とした尺度や短縮版など、いくつかの尺度が開発されている⁹⁻¹⁵⁾。その中で、丸島らの Generativity 尺度^{11, 12, 13)}は、McAdams, D. P. らが示す7つの心理社会的要素の概念に基づいて、「Generativity への関心」と「Generativity への行動」を基本として開発された「Loyola Generativity Scale (LGS)」を元に、日本語版としての尺度を作成している。その信頼性、妥当性はすでに検証されている。そして、本研究においては、高齢者の「Generativity への関心」の特質を明らかにすること、また、高齢者の生活にとって、「Generativity への関心」がどのように影響を及ぼしているかを検討することであり、今後の高齢者の心理社会的ケアの方向性を探ることにある。そのため、尺度として信頼性と妥当性が検証されており、質問項目内容が妥当であること、高齢者を対象として用いていることなどを考慮して、丸島らの Generativity 関心尺度を使用し、高齢者の Generativity と高齢者の QOL を追究していく。

以上のように、高齢者が、Generativity における要素のひとつでもある「Generativity への関心」を生活の中でどのように捉え、自己を肯定し、心理社会的適応に向かうのかを明らかにすることは、高齢者自身にとっても、ケア提供者にとっても重要である。なぜなら、そのような心理社会的適応は高齢者の QOL に影響を与えると考えるからである。

そのため本研究は、高齢者の「Generativity への関心」の特質を明らかにし、高齢者の生活に及ぼす Generativity について検討することを目的とする。

■ Generativity の定義

1. 高齢者の Generativity

Generativity とは、我が国では「世代性」という訳語が多く用いられている⁹⁻¹⁵⁾。本研究では高齢者の Generativity を以下のように定義する。ライフサイクルの最終段階の発達課題に影響を与えるものであり、統合された自己の経験から次世代に関心を持ち、自己の目標を感じて次の世代のために行動することである。次世代に自己の経験を伝える役割を果たすことにより、自己肯定できる心や、統合性を持った自己が確立され、希望や

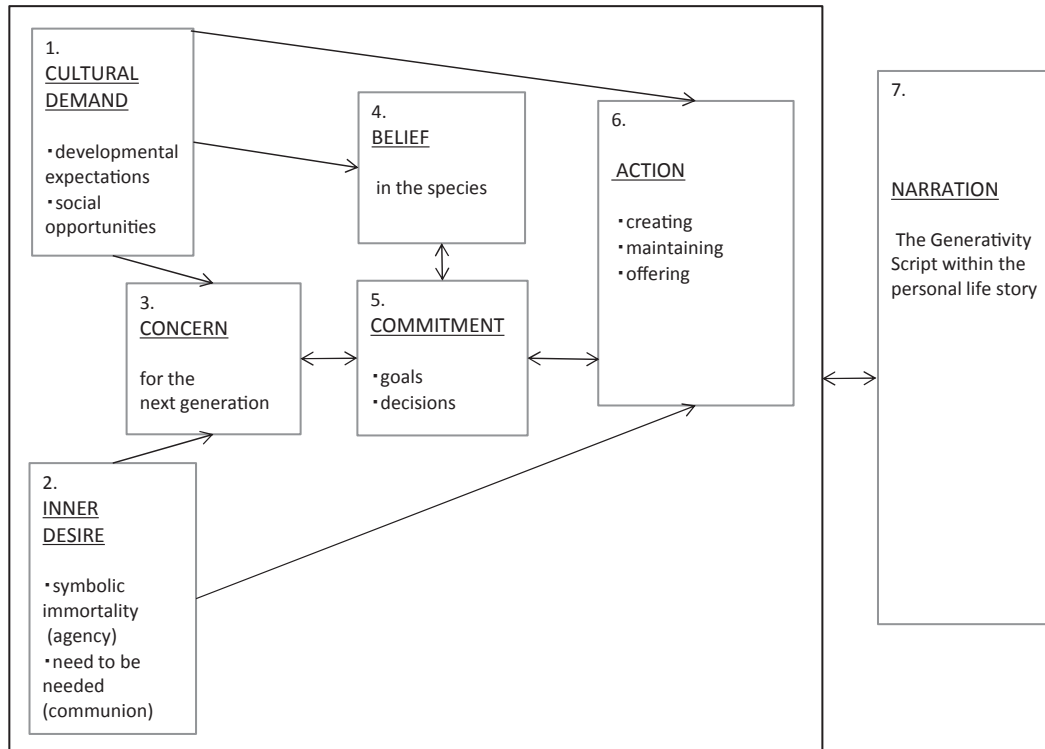


図1 McAdams らの Generativity の構成概念図⁴⁾

自己存在としての価値を持ち，目前に迫る自分自身の死の恐怖を乗り越え，老年期の心理社会的適応を促すものである。

2. Generativity への関心

「Generativity への関心」とは，McAdams の概念構成図⁴⁾ に示されたように（図1），内的希求（永続的な自己への欲求，象徴的な永遠の生命への欲求，必要とされることへの欲求のような個人の内面を突き動かす強い欲求¹³⁾）と，文化的要請（各々特定の文化において，個人が期待される社会貢献や社会的責任を果たそうとする動機¹⁰⁾）の2局面から影響を受けて構成されている概念である。「Generativity への関心」は「Generativity への行動」に繋がっていく。つまり，この2局面は，高齢者が Generativity を喚起するために必要かつ重要な誘因である。本研究は，この「Generativity への関心」に焦点を当てる。

■ 研究方法

1. 対象及び方法

1) 対象

2013年3～5月に，A市の老人クラブ会員で，地域に在住している598名に調査票を配布した。

その対象者は65歳以上で，日常生活動作が自立し，かつ，Activityが高い生活，すなわち，自らの意思をもち，自立した生活を営んでいる者である。調査票の回収ができた378名（63.2%）を対象とした。また，そのうちの全調査項目に1項目も欠損値がない276名（最終有効回答46.2%）を分析対象とした。A市の高齢化率は30%，そのうちの老人クラブ加入率は20.8%である。調査対象の老人クラブは25ブロックに分かれており，全ブロックを対象に調査を依頼した。

2) 方法

老人クラブの会長に研究の主旨と方法を説明し協力の同意を得た。会長を通して各地区役員会で説明が行われ，各地区の役員からそれぞれの集会時に会員に調査票が配布された。会員は自宅で調査票を記入し，郵送で回収した。

2. 調査内容

調査内容は，対象の基本属性と，心理的尺度で構成した。本研究の目的は，高齢者の「Generativity への関心」の特質を明らかにし，高齢者の生活に及ぼす Generativity について検討することにある。高齢者の世代性認識は，生活全般の様々な心理・行動ニードから生じると考えられるため，それらの解明には多様な心理尺度の

適用が必要になると思われるが、本研究では、Generativity に深く関係があると判断した心理尺度で構成した。

1) 基本属性：性別、年齢、家族構成、家族交流、友人交流、若い世代との交流、健康状態について尋ねた。基本属性は、調査研究において重要な位置づけをもち、対象集団の特質を表すものである。

2) 心理的尺度：

① Generativity 尺度：丸島らの改訂版世代性関心尺度 (Generativity concern Scale-R：以後、GCS-R)¹³⁾；創造性・世代継承性・世話の3因子20項目で構成されている。得点が高いほど世代性への関心が高いことを意味する。

本研究の中心課題を明確にするための尺度である。また、中心課題である Generativity における関心という概念に、影響を及ぼすであろうと考えられる心理的要因との間で分析を試みるために、本研究では必須の尺度である。

② 生活満足度：古谷野らのLSI-K (Life Satisfaction Index-K)^{16, 17)}；人生全体の満足感、心理的安定、老いについての評価の3因子9項目で構成されている。点数が高いほど満足感が高い。

高齢者の生活満足度と Generativity との間には、高齢者を対象にした研究ではないが、正の相関があると報告されている。高齢者を対象にした場合は関係がみられるのか検証する必要があると判断した。満足度尺度には幾つかあるが、LSI-K は、高齢者の人生全体の総合評価と、心理的な安定、更には、老いについての自己の評価を示す尺度である。本研究の目的から、生活が満足しているかどうかの問いは、高齢者の生活全般にかかわる心理的側面の調査の基本と考え採用した。また、LSI-K は、様々な高齢者の心理社会学調査にも用いられている尺度であり、他の研究対象者等の結果との比較検討が可能であることから本尺度を採用した。

③ 主観的健康統制感：堀毛の日本語版 Health Locus of Control (HLC)^{18, 19)}；自分自身、家族、専門職、偶然、超自然の5下位尺度ごと各5項目の合計25項目で構成されている。点数が高いほど健康への自己統制感が高い。

高齢者は長い人生を経てきた中で、健康の重要性を自覚している。自らの健康をどのように統制しているのか、健康統制感と Generativity とにおいて関係性はあるのか、について検討する必要があると判断した。高齢者の健康は、生活する

上において重要な項目であり、健康と Generativity との関係性に注目した。

④ スピリチュアリティ健康感 (以後、SP 健康感)：竹田らの高齢者版スピリチュアリティ健康尺度²⁰⁾；生きる意味・目的、死と死にゆくことへの態度、自己超越、他者との調和、よりどころ、自然との融和の6因子18項目で構成されている。得点が高いほどスピリチュアリティが高いことを意味する。

近年、研究が進められているスピリチュアリティ健康感とは、心の奥底に存在する魂の課題というべきもので、生きる意味や死への問い、今後のこと等について自己を深く見つめるという内容で構成されている。高齢者のスピリチュアリティ健康感とは精神的健康にも通じ、自己の生き方と Generativity との間には関係性があるのではないかと考えた。また、あらゆる心の動きに関係していると考えたため、尺度として採用した。なお、本研究では精神的負担のかからない表現に一部改正して使用した。

⑤ 自己効力感：坂野ら：General Self-Efficacy Scale (GSES)^{21, 22)}；行動の積極性、失敗に対する不安、能力の社会的位置づけの3因子16項目で、点数が高い方が自己効力感が高い。本研究では性別による影響を排除した標準化得点を用いた。

自己効力感とは、ある仕事(行為)をする時の自分の能力に対する自信、確信であり、自分の目標を達成するための能力がどのくらいあると信じているか、自分に対する信頼感や有能感を意味する。高齢者が自己効力感を高く持つときは、Generativity を発揮するという仮説を持ったため、本研究では、高齢者が自己に対する価値をどのように認識しているかを理解する必要があり、調査が必要と判断した。

⑥ 孤独感：諸井ら：改訂版 UCLA 孤独感尺度日本語版^{23, 24)}；20項目のうち逆転項目が10項目設定されている。点数が高いほど孤独感が強い。

高齢者を対象とした研究ではないが、Generativity は、抑うつなどの非適応的心理特性と負の相関が見られることは報告されている。高齢者を対象とした場合は関係性が見られるのか、検討する必要があると判断した。高齢者の孤独感は閉じこもりやうつ傾向と関連しており、Generativity の発揮の有無とも関係性があると考えた。

⑦ 自尊感情：山本らの作成した自尊感情尺度^{25, 26)}；自己の能力や価値についての評価的感情や感覚を示す尺度である。10項目の評定を加算する。逆転

項目は5項目設定され、点数が高いほど自尊感情は高い。

自尊感情とは、自分自身に対する肯定的な認知や感情を指す。自尊感情なくして他者尊重はありえず、他者を思う態度は次世代を思う気持ちに通じる。自尊感情は Generativity の関心・育成へと繋がっていると考え、本研究の尺度として用いた。

なお、すべての尺度における逆転項目は点数を逆転させて集計した。

3. 分析方法

SPSS Statistics 18.0j, SPSS Amos 21.0j を使用し、以下の分析を行った。対象者の属性については、記述統計量を算出した。GCS-R の20項目、及びその他の心理的尺度に対して、天井効果・床効果・I-T 相関・G-P 分析を行い、削除項目がなく、尺度として信頼性と妥当性を確認した。その後、GCS-R に対して、探索的因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った結果、5項目が削除され、3因子15項目が抽出された。信頼性の検討は Cronbach's α 係数を算出した。次に、3因子15項目の尺度としての妥当性を確認するため、確認的因子分析を行い、モデルの適合度を適合指標 (GFI)、自由度修正済み適合度指標 (AGFI)、比較適合度指標 (CFI)、平均二乗誤差平方根 (RMSEA) で確認した。その後、因子分析で得られた3因子の合計を合成得点とし、各心理社会的尺度との相関 (Pearson の相関係数)、及び、各変数間の関連性の影響を除外した各変数との相関関係を検討するために偏相関係数を求めた。さらに、高齢者の Generativity への関心を潜在変数とし、各心理社会的尺度を観測変数とした仮説モデルを作成し、モデルの適合性を検証するため共分散構造分析を行った。その際、各心理社会的尺度と Generativity への関心との関係を検討し、分析を繰り返して、適合度のより高いモデルを探索的に検討した。

4. 倫理的配慮

本研究はC大学倫理委員会の承認を得て行った。調査票には研究の主旨と調査票記入に必要な時間、回収方法、及び、プライバシーは守られること、また、負担と感じた場合は、調査への記入を中断してもよいことを明記した。そして、調査票回収後の取り扱いへの配慮等を記載した依頼文書を付し、投函をもって研究協力への同意とした。

■ 研究結果

1. 対象者の特徴

対象者の概要を表1に示した。分析対象者は276名で、全体の平均年齢は75.6±5.7歳（最低年齢65歳～最高年齢90歳）、前期高齢者が122名（平均年齢70.36±2.84歳）であり、後期高齢者は154名（平均年齢79.74±3.48歳）であった。その内訳は、男性166名（60.1%）、女性110名（39.9%）であった。月に1回以上の家族交流について、0～1人あると答えた者が53名（19.2%）で、2～3人と答えた者が115名（41.7%）、4人以上と答えた者が108名（39.1%）であった。友人との交流は、気兼ねなく話せる友人が、0～1人あると答えた者が60名（21.7%）、2～3名と答えた者が146名（52.9%）、4人以上と答えた者が70名（25.4%）であった。若い世代との交流は、全く或は減多に交流がないと答えた者が57名（20.6%）、少し或はいつも交流している者が219名（79.4%）であった。健康状態は、症状がないと答えた者が114名（41.3%）で、何らかの身体的症状がある者が162名（58.7%）であった。

2. 高齢者の Generativity における「関心」の特質

丸島らの改訂版世代性関心尺度 (GCS-R) において、天井効果・床効果・I-T 相関・G-P 分析を行った結果、その20項目には削除項目はなく、全

表1 対象の基本属性

		n=276	
年齢	全体	75.59±5.67	
	前期高齢者 (n=122)	70.36±2.84	(65～74歳)
	後期高齢者 (n=154)	79.74±3.48	(75～90歳)
		人数	(%)
性別	男性	166	(60.1)
	女性	110	(39.9)
家族構成	1人暮らし	47	(17.0)
	夫婦二人	164	(59.4)
	子ども夫婦と同居	15	(5.4)
	三世帯世帯	11	(4.0)
	その他	39	(14.1)
家族との交流	0人～1人	53	(19.2)
	2人～3人	115	(41.7)
	4人以上	108	(39.1)
友人との交流	0人～1人	60	(21.7)
	2人～3人	146	(52.9)
	4人以上	70	(25.4)
若い世代との交流	全く交流していない	18	(6.5)
	めったに交流していない	39	(14.1)
	少しは交流している	149	(54.0)
	いつも交流している	70	(25.4)
健康状態	症状はない	114	(41.3)
	症状がある	162	(58.7)

項目で探索的因子分析を行った。その結果は表2の通りである。固有値の変化量から因子数を3に定め、因子負荷量0.4以上の項目を採用し、3因子15項目を抽出した。第1因子は「私は大多数の人と違ったところがあるように感じる」等の項目であり【創造性； $\alpha=.82$ 】と命名した。第2因子は「他人の面倒をよく見る」等で【世代継承性； $\alpha=.74$ 】と命名した。第3因子は「私は何かを考えて、いい考えが浮かんだ時とてもうれしく感じる」等で【積極性； $\alpha=.68$ 】と命名した。次に、探索的因子分析で得られた因子構造の妥当性を検証するため、確認的因子分析を行った。その結果を図2に示す。GFIが.90、AGFIは.86であった。また、CFIは.88、RMSEAは.08で適合度に問題はなく、基準に達していると判断した。

3. Generativity 3因子の合成得点と各尺度との相関関係、及び偏相関関係

本研究で得られた Generativity 3因子の合成得点と各心理的尺度得点の平均と、相関係数、及び偏相関係数を表3に示した。各尺度の平均得点は、GCS合成得点が 37.21 ± 5.79 、生活満足度は 4.89 ± 2.1 、主観的健康統制感 95.96 ± 13.0 、SP健康感が 66.41 ± 7.9 、自己効力感が 47.9 ± 11.1 、孤独感 39.97 ± 7.8 、自尊感情 35.34 ± 5.04 であった。

Generativity 合成得点は、生活満足度を除く全ての尺度と相関していた ($r=.17, p<.01$, $r=.44, p<.001$, $r=.39, p<.001$, $r=.22, p<.001$, $r=.37, p<.001$,)。主観的健康統制感はSP健康感と相関し ($r=.46, p<.001$)、SP健康感 $r=.21, p<.001$ 、自己効力感、孤独感、自尊感情とそれぞれ相関していた ($r=.21, p<.001$, $r=.32, p<.001$, $r=.22, p<.001$,)。各変数間の関連性の影響を除外した偏相関係数を求めた結果、Generativity 合成得点と相関がみられなかった変数は生活満足度、主観的健康統制感、孤独感であり、各変数間の影響を除外しない場合の相関は認められたが、その他の変数による影響を除外した場合、孤独感と生活満足度、自尊感情とSP健康感との間に相関関係は認められなかった。

4. 高齢者の「Generativity への関心」と心理社会的要因との関係

「Generativity への関心」を潜在変数とした仮説モデルを元に、探索的に検討し、共分散構造分析を行った。すべての要因間にパスを設定し、分析を行ったが、図3には有意なパスのみを結果として示した。GFI=.96、AGFI=.90、CFI=.95、RMSEA=.07でモデルの適合度は良いと判断した。高齢者の「Generativity への関心」は他者との交流（家族交流のみ除く）から影響を受け、

表2 探索的因子分析の結果

全体	$\alpha = .89$	第1因子	第2因子	第3因子
第1因子：創造性 $\alpha = .82$				
GCS2	私は大多数の人と違ったところがあるように感じる	.771	-.027	-.279
GCS4	私は他人がびっくりするようなことをしたり、ものを作ったことがあります	.658	-.025	.013
GCS10	物を考えるときに変わった考えができます	.628	.078	.026
GCS1	私は変わったことや珍しいことをするのが好きだ	.622	.225	-.065
GCS5	私は自分がすることは、たいてい新しく創造的であるように努めて	.607	.221	.011
GCS6	私は夢のようなことを考えるのが好きだ	.570	-.165	.325
第2因子：世代継承性 $\alpha = .74$				
GCS11	他人の面倒をよく見る	.022	.717	-.100
GCS19	困っている人を見ると、つい手助けしたくなる	-.026	.682	.106
GCS17	私の死後にも、私が貢献したことは残っているように思う	.136	.465	.101
GCS20	自分の経験を通して得た知識などを他人に伝える努力をしてきた	.194	.453	-.072
GCS18	奉仕活動に喜んで参加する	-.039	.411	.287
第3因子：積極性 $\alpha = .68$				
GCS8	私は何かを考えて、いい考えが浮かんだ時とてもうれしく感じる	.267	-.143	.694
GCS7	私は問題をといたり、ものを作ったりしている時が一番楽しい	.337	-.114	.560
GCS13	相手の話に耳を傾ける	-.301	.382	.540
GCS14	子どもの世話をよくする	-.108	.080	.442
因子間相関				
第1因子		1.000		
第2因子		.332	1.000	
第3因子		.502	.515	1.000
削除された項目				
GCS9	私は自分のこれまでの生き方を若い人に伝えていくように努めてきた			
GCS3	悲しんでいる人を見たらなぐさめる			
GCS15	次世代のために環境汚染に繋がることをしないように極力努めている			
GCS16	私は自分の死後に残るようなことは何もしていないと思う			
GCS12	私は他人に寄与するような価値のあることは何もしていない			

「Generativity への関心」を介在して SP 健康感、孤独感、自尊感情、自己効力感を高めていた。SP 健康感、孤独感、自尊感情、自己効力感とは他者との交流から直接的にも影響を受けていたが、それぞれは「Generativity への関心」を介する影響のほうがパス係数は高かった。また、「Generativity への関心」、SP 健康感、主観的健康統制感、孤独感、自尊感情、自己効力感は、生活満足度に直接的、間接的に影響し、それらの影響による生活満足度の決定係数は、 $R^2=.22$ であった。

■ 考 察

超高齢社会を迎える我が国において、高齢者の生活の質を保障するケアの追究は今後ますます論

じられることと考える。老年期の Generativity は、次世代を産み育てた出来事を回想し、人生の意味を再評価することと、自己が培ってきた人生の産物を次世代に経験として伝えることが両輪となり、それらが自我統合の軸として機能しながら、かつ老年期の終盤に訪れる死の意味とその適応に向かって生を営んでいくという特徴を持つ。それゆえ、老年期の Generativity に関する研究は、人間が幸福に生きるための重要な糸口を提供する。

丸島は、Generativity 関心尺度の開発によって、Generativity の関心が創造性・世代継承性・世話の3因子構造であることを報告している¹³⁾。丸島らの研究は、25～75歳という広い年齢層を対象として尺度開発を行っており、抽出された3因子は、高齢者特有の Generativity 関心尺度とは

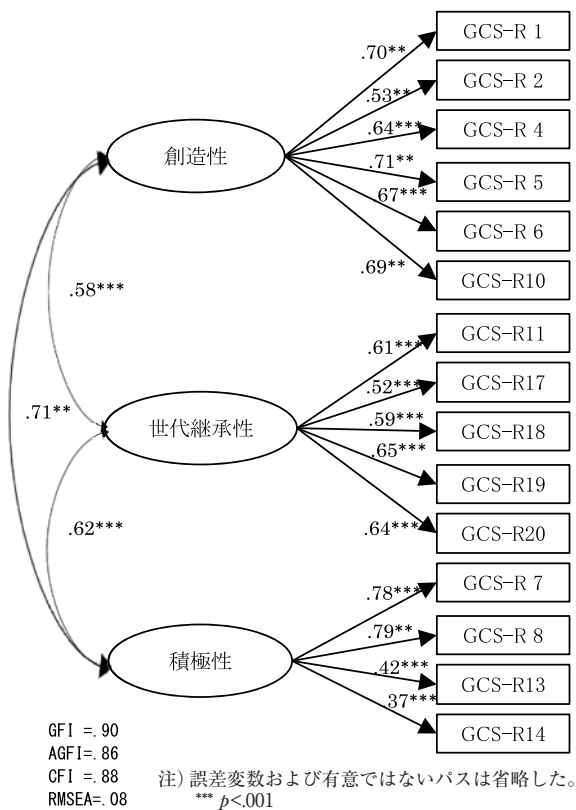


図2 高齢者の Generativity における関心の確認的因子分析

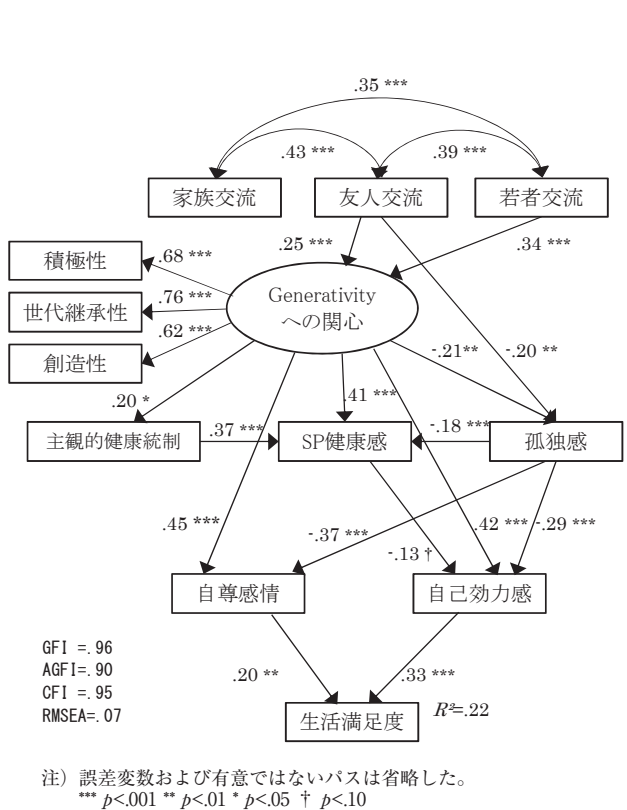


図3 Generativity への関心を介在した生活要因モデル

表3 GCS 合成得点と各要因の平均及び相関（右上段）と偏相関（左下段）

	平均	標準偏差	GCS合成得点	生活満足度	主観的健康統制感	スピリチュアリティ健康感	GSES標準化得点	孤独感	自尊感情	α 係数
GCS合成得点	37.21 ± 5.79		—	.107	.174 **	.436 ***	.388 ***	-.219 ***	.374 ***	0.89
生活満足度	4.89 ± 2.11		-.066	—	-.110	.008	.422 ***	-.249 ***	.364 ***	
主観的健康統制感	95.96 ± 13.77		.038	-.033	—	.455 ***	-.054	-.005	-.040	0.88
スピリチュアリティ健康感	66.41 ± 7.90		.317 ***	-.074	.446 ***	—	.213 ***	-.320 ***	.222 ***	0.89
GSES標準化得点	47.93 ± 11.16		.238***	.288 ***	-.081	.038	—	-.395 ***	.527 ***	0.89
孤独感	39.97 ± 7.86		.073	-.070	.089	-.266 ***	-.167 ***	—	-.436 ***	0.85
自尊感情	35.34 ± 5.05		.206 ***	.180 **	-.059	.025	.279 ***	-.254 ***	—	0.76

p<.01 *p<.001

えない。しかし、丸島らの尺度は、高齢者の経験を伝え、継承するという意味にとどまらず、人生の意味や人として適応に向かっていく生の営みを表現することのできる尺度と考えたため、本研究では丸島らの尺度を用いて研究を進めた。

1. 高齢者の Generativity における関心の特質

本研究の結果から、高齢者の「Generativity への関心」は、創造性・世代継承性・積極性の3因子が抽出された。本研究は、老人クラブという居場所、積極的に生活している65歳以上の高齢者を対象としたものであり、得られた3因子は高齢者の「Generativity への関心」の特質を示している。生涯発達の観点から老年期を見た場合、老年期は成人期と比べて、子育てから解放され、いわゆる産み育てるという直接的な役割から離脱するステージである。しかし、高齢者個人が社会的な生活を営んできた中で培ってきた知恵や技術は、失われるものではなく、次の世代へ受け継がれ、継承されていくものである。高齢者が「Generativity への関心」を発揮するときは、McAdamsらが指摘するように、内的希求と文化的要請が存在する。永続的な自己¹²⁾として存在することへの欲求、期待される社会的責任を果たそうとする高齢者の動機¹⁰⁾という2つの局面によって、本研究の下位概念は抽出されたものと考えられる。

第1因子：創造性は、「大多数の人と違ったところがあるように感じる」、「他者がびっくりするようなことをした」、「人とは違った考えができる」から構成されており、個人が生きてきた中で他者とは違った unique かつ個人的で、個人の内面を突き動かすニードとして、自己の存在意義を Generativity の中に表現しているものと考えられる。第2因子：世代継承性は、「他人の面倒をよく見る」「私の死後にも、私が貢献したことは残っているように思う」「自分の経験を通して得た知識などを他人に伝える努力をしてきた」などから構成されており、個人が生きてきた知恵や英知を他者や社会に残すという社会的責任を Generativity の中で表現しているものと考えられる。第3因子：積極性は、「いい考えが浮かんだ時にうれしい」「何かを考え、制作しているときが楽しい」「相手の話に耳を傾ける」「子どもの世話を良くする」で構成されており、中年期の直接的世代継承性から老年期の祖父母的世代継承性へ世代性は変容²⁷⁾しつつも、直接的世代継承性への希求は強く存在

し、なおかつ、先祖から自己に引き継がれたものを、一歩引いた立場から次世代に残し、守り、案ずる²⁷⁾といった形で、自己を最大限に活用しようとするのが表現されていると考える。

以上の3因子は、高齢者が自己を完結させるために Generativity に関心を持ち、行動するために必要な、高齢者の Generativity の特質であると考えられる。特に、創造性、積極性が「Generativity への関心」の下位概念として抽出されたことは、高齢者が次世代のために何かを伝えるということだけではなく、高齢者自身が自己完結させる¹²⁾ための関心であることを包含している。

2. 高齢者の生活と Generativity

Generativity が高齢者の生活にどのような影響を及ぼしているのかを、基本属性である他者との交流と、高齢者の「Generativity への関心」、及び各心理的側面から、その関連性を探索的に分析した。その結果、図3から説明できるように、友人や若者との交流が「Generativity への関心」に影響を与えていた。また、「Generativity への関心」が介在し、高齢者の SP 健康感、自尊感情、自己効力感に影響していた。さらに、それらが高齢者の生活満足に繋がっていた。これらのことは、高齢者にとって、他者との交流が刺激となり、自己の中の創造性や、培ってきた経験を継承することや、生活を積極的に捉え、自己を活用することに繋がっていることを証明している。また、それらは、高齢者の「Generativity への関心」を高め、永続的な自己への欲求と、社会への責任を果たすことへの関心を喚起させることに繋がる。そして、「Generativity への関心」は、高齢者自身の自己を完結させ、自己の存在価値を高めることに繋がっていると言えよう。そのことは、高齢者が自身の生活に対する満足度を高めることにも繋がる。

このように、高齢者の「Generativity への関心」は、高齢者の生活にとって、高齢者の自己を完結させ、自己の存在価値を認識し、生活満足を感じるために必要な媒介要因であると推察された。そして、他者との交流は「Generativity への関心」を喚起するために必要な外的要因でもあり、他者と繋がることはまた、他者から必要とされることへの自己の認識となり、高齢者の内面にある脈々と継承されてきた Generativity における関心を実行に移すことに繋がる。しかし、今回の結果では家族との交流は「Generativity への関心」とは

つながらなかった。それは、本調査対象の高齢者は子供や孫との直接的な関係性のステージにあった対象というより、平均年齢も高く象徴的な世代性への関心へと変容²⁷⁾していることが影響しているものと考えられる。高齢者一人ひとりの背景にあった「Generativity への関心」が喚起することによって、高齢者が自己を肯定的に捉えられる心に影響する。そして、自己を完結する、つまり、高齢者の心理社会的適応を促す要因となる。したがって、Generativity における関心と高齢者の心理社会的要因は、深い関係にあり、高齢者の生活は、高齢者の心の持ち方、他者との交流、満足している生活、孤独でないという積極的な生き方を持つことにより、高齢者 QOL を高めていき、高齢者の生活にとって重要なキーワードとなっていた。

なお、本研究結果で得られた生活満足度、主観的健康統制感、SP 健康感、自己効力感、孤独感、自尊感情のそれぞれの尺度の平均得点を既存の調査^{28~38)}と比較した結果、本調査対象者は既存の文献の対象者よりも平均年齢は高いものの、各尺度の平均得点は他の文献結果と大きな差は認められなかった。このことは、本調査対象者が老人クラブという場所で自分らしく他者と繋がりがながら生活できていることから、精神的健康度が保たれている集団であることが伺えた。また、本研究の Generativity 合成得点は、心理的尺度と相関していたことは、既存の文献³⁾と同じ結果であった。

超高齢社会における高齢者の生活の質 (QOL) を考えるとき、高齢者自身が生きることに関心を感じ、生きる意義を見出し、生きる価値を感じることが重要である^{39, 40)}。「Generativity への関心」は、高齢者の生活の質を高めるための様々な心理社会的要因と関連しており、高齢者の生活満足度に影響を与えていることが本研究によって明らかとなった。そのことは、「Generativity への関心」が、高齢者の生活にとって、重要な要素の一つであることが判明した。そして、「Generativity への関心」が高齢者の自尊感情や自己効力感を高めること、またそれが、同世代や若者世代との繋がりがから影響を受けていることが明確になったことは、「Generativity への関心」という概念は、避けられない老いと病の状況にあっても、高齢者自身が自己の存在を意義があると認識し、また価値ある自己と受け止めることにおいて重要な概念であるとも推測できる。

本研究の成果は、今後の高齢者支援の在り方に一つの示唆を与える。

「Generativity への関心」が、友人や若者交流など、対人関係において促進されることから、地域においては、高齢者の社会参加を促し、他者との交流を持つための方策をケアシステムとして組織的に検討する必要がある。すでに高齢者を対象とした多様な活動（高齢者大学、高齢者ボランティア、高齢者クラブ、新老人の会等）が存在するが、看護者が参加することにより、本研究成果を踏まえて次世代をはぐくみ、育てるという意識の啓発を行うことができる。様々な年代の集まりや同僚間において、高齢者から次世代等へ種々の遺産が継承されていき、社会の活性化が生じる。また社会の中で、高齢者の役割意識が形成される。

看護の現場においては、高齢者を支える看護者は次世代に生きる存在である。看護者は今以上に、高齢者との交流を積極的にもつことが重要になるであろう。ケアを受けている高齢者であっても、長い人生において培ってきた英知や技能、人生の生き方等を自己開示し、人生を語ることによって思いや意味内容を看護者や次世代に繋げていく。高齢者は尊重されていると感じ、長く生きてきた人生に感謝し、自己の持つ遺産を次世代に繋げる役割を発揮でき、高齢者の QOL は保証されるものになるといえよう。

また次世代に生きる人々にとって高齢者と繋がりが合うことは、高齢者の持つ価値を感じ取り、社会全体が明るく活気に満ちたものとなり、豊かな社会が形成される。このように、「Generativity」の研究は、成熟した高齢社会を形成するための主要な位置づけにあり、社会的価値を持つ。

さらに、看護教育においても、高齢者の「Generativity」に関する内容を学生に教授することは重要な意味を持つ。看護学生は「Generativity」の概念を明確に学ぶことにより、高齢者を肯定的な視点で見つめることができる。また、人間は繋がって生きているということの大切さに気付くのである。学生は看護実習において高齢者看護を展開するとき、学生の持つ「Generativity」の哲学・思想は実践の中で生かされ、高齢者とのかかわりにおいては高齢者の人生を大切に思い、高齢者その人をありのままに受け止めることによって、学生には多くの遺産が継承されていく。新しい高齢者像の構築に貢献できるのではないだろうか。

このように、本研究は、高齢者の生き方や活か

し方・支え方に役立つ考え・思想を提供したものであり、超高齢社会で生きる高齢者の、社会的存在価値や役割発揮の可能性を論じており、高齢者が、社会貢献できるという意味において、研究的価値を持つと考えている。

■ 今後の課題と限界

本研究は一部の地域で、かつ、対象者も少なく、限定された対象者への調査であることから、今後は地域性も考慮し、対象数を増やして検証する必要がある。また、超高齢社会を迎えた我が国において、高齢者の身体的機能の低下のみに着目するのではなく、高齢者の Generativity に関して理解することが必要であろう。このことは、高齢者自身の QOL を高めるだけでなく、次世代にも重要な意味を投げかける。すなわち、加齢によって

喪失していくものもあるが、それ以上に高齢者には英知や経験や知恵があるため、次世代にとって高齢者は価値ある存在であると言える。今後引き続き、高齢者にとって Generativity がどのような意味を持つのかを、その他の心理社会的要因との関係からも追究し、高齢者の QOL を保証するケアを検討していく必要がある。

【謝辞】

本研究に当たって、調査にご協力くださいました老人クラブ会長をはじめ、会員の皆様、本大学の前教授である香川治子先生、そして、分析の過程でご指導とご助言をいただいた目白大学の西川千登世さん、河野理恵先生に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) Erikson, E. H.: Childhood and society. 2nd ed. New York, W. W. Norton & Company Inc.; 272-273 (1963), (Original work published in 1952), (仁科弥生訳：幼児期と社会 I みすず書房)
- 2) 内閣府：平成24年度版高齢社会白書：46, 2012.
- 3) 小澤義雄：老年期の Generativity 研究の課題－その心理社会的適応メカニズムの解明に向けて－. 老年社会科学, 34 (1) : 46-56, 2012.
- 4) McAdams, D. P., & Aubin, E. S.: A theory of generativity and its assessment through self-report, Behavioral acts, and narrative themes in Autobiography., Journal of Personality and Social Psychology, 62 (6): 1003-1015, 1992.
- 5) McAdams, D. P. & Aubin, E. S., Logan, R. L.: Generativity among young, midlife, and older adults, Psychology and Aging, 8 (2): 221-230, 1993.
- 6) McAdams, D. P., Diamond A, Aubin, E. S. et al.: Stories of commitment; The psychosocial construction of generative lives., Journal of Personality and Social Psychology, 72 (3): 678-694, 1997.
- 7) Cheng, S. C.: Generativity in Later life; Perceived respect from younger generations as a determinant of goal disengagement and psychological well-being. The journals of Gerontology, 64B: 45-54, 2009.
- 8) Aubin, E. S. & McAdams, D. P.: The relations of generative concern and generative action to personality trait, satisfaction / happiness with life and ego development. Journal of Adult Development, 2: 99-112, 1995.
- 9) 齋藤幸子, 星山佳治, 宮原忍：少子社会における次世代育成力に関する調査. 保健医療科学, 53 (3) : 218-227, 2004.
- 10) 田渕恵：世代性 (Generativity) の概念と尺度の変遷. 生老病死の行動科学, 15 (0) : 13-20, 2010.
- 11) 丸島令子：世代性尺度の作成－世代性の関心と行動モデルの測定－. Journal of Japanese Clinical Psychology, 23 (4) : 422-433, 2005.
- 12) 丸島令子：成人の心理社会的発達研究：Erikson 理論における「世代性 (generativity)」測定の試み：世代性の関心, 行動, ナレーションから, 人間科学紀要, 2 : 31-48, 2006.
- 13) 丸島令子, 有光興記：世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性, 妥当性の検討, 心理学研究, 78 (3) : 303-309, 2007.

- 14) 堀毛一也：成人期のサステナブルな信念の個人差に関する研究．日本社会心理学会第49回大会発表論文集：202-203, 2008.
- 15) 田淵 恵, 中川 威, 榎藤 恭之ほか：高齢者における短縮版 Generativity 尺度の作成と信頼性・妥当性の検討．厚生学指標, 59 (3)：1-7, 2012.
- 16) 古谷野亘, 柴田博, 芳賀博, 須山靖男：生活満足度の構造—因子構造の不変性—. 老年社会科学, 12：102-116, 1990.
- 17) 芳賀博：高齢者の生活満足度 Well-being のアセスメント．Geriatric Medicine, 4, (1)：22-27, 2002.
- 18) 堀毛裕子：日本版 Health Locus of Control 尺度の作成．健康心理学研究, 4 (1)：1-7, 1991.
- 19) 堀毛裕子：日本版 HLC (主観的健康統制感) 尺度．(堀洋通監修, 松井豊編) 心理測定尺度集Ⅲ心の健康をはかる〈適応・臨床〉；84-93, サイエンス社, 東京, 2001.
- 20) 竹田恵子, 太湯好子, 桐野匡史他：高齢者のスピリチュアリティ健康尺度の開発—妥当性と信頼性の検証—. 日本保健科学学会誌, 10 (2)：63-72, 2007.
- 21) 坂野雄二, 東條光彦：一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み．行動療法研究, 12 (1)：73-82, 1986.
- 22) ころネット株式会社：自己効力感を測定する質問紙 GSES 一般性セルフ・エフィカシー尺度, (<http://www.kokoronet.ne.jp/fukui/gses/>, 2012.7.29)
- 23) 諸井克英：改訂版 UCLA 孤独感尺度の次元性の検討．人文論集, 42：23-51, 1991.
- 24) 諸井克英：改訂版 UCLA 孤独感尺度日本語版 (堀洋通監修, 山本真理子編)：心理測定尺度集Ⅰ人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉, 222-225, サイエンス社, 東京, 2001.
- 25) 山本真理子, 松井豊, 山成由紀子：認知された自己の諸側面の構造．教育心理学研究, 30 (1)：64-68, 1982.
- 26) 山本真理子, 松井豊, 山成由紀子：自尊感情尺度．(堀洋通監修, 山本真理子編)：心理測定尺度集Ⅰ人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉, 29-31, サイエンス社, 東京, 2001.
- 27) 深瀬裕子, 岡本祐子：中年期から老年期に至る世代継承性の変容, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第三部, 59号：145-152, 2010.
- 28) 青木邦男：在宅高齢者の孤独感とそれに関連する要因—地方都市の調査研究から—, 社会福祉学, 42 (1)：125-136, 2001.
- 29) 森美保子, 福島脩美：自己対面法によるライフレビューが高齢者に与える影響, 目白大学心理学研究, (4)：85-99, 2008.
- 30) 深堀敦子, 鈴木みずえ, グライナー智恵子他：地域で生活する健常高齢者の介護予防行動に影響を及ぼす要因の検討, 日本看護科学会誌, 29 (1)：15-24, 2009.
- 31) 木村紗矢香, 松田修：老いと向き合う対処尺度の作成と検討—信頼性と妥当性の検討—, 東京学芸大学紀要1部門, 56：173-178, 2005.
- 32) 竹内香織, 磯和勅子, 福井享子：地域高齢者における主観的幸福感に関連する社会活動要因, 三重看護学誌, 13：23-30, 2011.
- 33) 古川秀敏, 国武和子：地域在住高齢者の抑うつに関連要因—N県N町の老人クラブの調査結果—, 日本看護研究学会雑誌, 30 (4)：61-66, 2007.
- 34) 則定百合子, 齋藤誠一：老年期の孤独感と生活意識に関する研究, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 3 (1)：101-106, 2009.
- 35) 中澤世都子：高齢者の孤独感と文化的自己感の類型が適応におよぼす影響, 老年社会科学, 29 (3)：384-391, 2007.
- 36) 橋本有理子, 本村汎：老年期の自尊感情に関する一研究, 大阪市立大学生生活科学部紀要, 45：1-11, 1997.
- 37) 末田啓二：高齢者の「教える」行為と心理的適応との関係—「教える」行為に対する高齢者と青年の意識—, 近畿大学教育論叢, 13 (2)：1-10, 2002.
- 38) 河野保子：認知症患者の尊厳性に関する加増対処行動と支援システムの構築, 平成20年～22年度科

学研究費補助金研究成果報告書，2011.

39) 萬代隆，日野原重明：Quality of Life 医療新次元の創造，メディカルレビュー社，東京，1996.

40) 内田伸子編著：第1巻 誕生から死までのウェルビーイングー老いと死から人間の発達を考える：お茶の水女子大学21世紀 COE プログラム 誕生から死までの人間発達科学，金子書房，東京，2006.

参考文献

竹内一真：「経験の伝承」における生涯発達の視点からの先行研究の検討：generativity 研究に焦点を当てて：京都大学大学院教育学研究科紀要，58：383-395，2012.

英文抄録

Characteristics of “concern” in senior citizens generativity, and influence of generativity to senior citizens’ lives

Hiroshima Bunka Gakuen University, School of Nursing

Mari Sanai

Hiroshima Bunka Gakuen University, Graduate School of Nursing

Yasuko Kawano

The purpose of this research is to clearly show what kind of influence generativity has on the life of senior citizens by verifying their characteristic of “concern” in generativity. A survey was made of 276 senior citizens in the local community using Marushima’s GCS-R (Generativity Concern Scale). As a result of exploratory factor analysis, 15 items relating to 3 factors (creativity, $a=.89$, maintaining, $a=.74$, positivity, $a=.68$) were extracted as the generativity concern concept of senior citizens. In a confirmatory factor analysis, the admissible goodness of fit was also shown. Subsequently, as a result of performing a covariance characteristic of psychosocial factors with senior citizen’s generativity concern as a latent variable, the goodness of fit of the hypothetical model was found to be within permissible range. The generativity of senior citizens, due to exchanges with other people, was affected by their degree of spiritual health, feelings of loneliness, self-efficiency, and self-respect, and due to these factors, also by their degree of satisfaction in life.

Key words: senior citizen, generativity, concern, life satisfaction